

Title	古代の美女、醜女
Sub Title	Beautiful and plain women of ancient Japan
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1975
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.47, No.1/2 (1975. 12) ,p.137- 155
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	随筆
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19751200-0137">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19751200-0137</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 古代の美女、醜女

松 本 芳 夫

一

何事によらず、われわれに快感や、よろこびを与えてくれるものに対して、美を感じ、不快や憎悪をおこさせるものに対して、醜を感じるのは、つねである。自然界はいうまでもなく、人事においてもそうであって、その盛衰・行状はいうまでもなく、男女の区別があるために、その形姿容貌について、それぞれ相手の美醜を感じやすい。

美意識は、時代や個人によって、いくらかの相異はあるけれども、いつの時代においても、男女は相互に批判し合うのであって、ことに貴族時代といわれる古代においては、男性から見た女性の批判は、はなはだきびしかったようである。ここに美女（くわしめ）醜女（しこめ）が生じた。

古代の美女、醜女

二

古代において、美女と言われたのは、どういう女性であったろうか、それには、まず美女を示した語句を検しよ

う。  
イザナギノ命とイザナミノ命とが、みとのまぐわいをした時、男神が女神を『美哉好少女』と呼び、また黄泉国で会った時、男神が女神を、『愛しき我那邇妹命』と呼んだという（古事記上）。書紀では『意哉、遇可美少女』とか、『妍哉可愛少女』（一ノ一書）とか、『美哉善少女』（五ノ一書）などであるが、これは相手を美しいとか、かわいいとほめたのである。

アマテラス大神については、書紀に、『光華明彩、六合

（一三七） 一三七

の内に照り徹る』とか、『質性、明麗』などとあるが、これは日神としての性質をしめしたのであって、容貌や形姿について言ったのではない。

ヤチホコノ神がヌナカワヒメに求婚した時、『……越の国に、俊女をありと聞かして、麗女を有りと聞かして』とうたっているが(古事記上)、俊女は賢女を意味し、麗女は美女をいうのである。

ゴノハナノサクヤヒメについては(古事記上)、『麗き美女』とあり、書紀では、単に『美女』とか、或は『国色』とあり、播磨風土記(宋木郡)では、『其形美麗』とある。ヒゴホホデミノ尊が海神の宮で婚したトヨタマヒメは、『容貌絶世』とある(書紀一書)。

神武天皇の太后イスケヨリヒメノ母セヤダタラヒメは、『容姿麗美』と言われ(古事記上)、書紀では、皇后のヒメタタライスズヒメノ命は、『国色秀者』とある(即位前記)。古事記では、天皇が七人の媛女の先頭に立っているイスケヨリヒメを見て、『いやさき立てる 愛をし覚かむ』と言っているが、これはかわいい少女と婚しよう、という

のであろう。

崇神朝に、神を祭って疫病をしずめたオオタタネコの祖先のオオモノヌシノ大神が婚したイクタマヨリヒメは、『容姿端正』と言われている(古事記中)。ツヌガアラシトが婚した女は、石が化した『美麗童女』であった(垂仁紀二年一書)。同記四年(秋九月)に『佳人多し』とあり、また天皇が山背国で娶ったカムハタトベは、『姿形美麗』であった(同紀三十四年三月)。

美濃国造の祖カムオオネノミコの二女、エヒメ、オトヒメは、ともに『容姿麗美』と言われ(古事記中)、書紀では、オトヒメは『容姿端正』、姉のヤサカノイリヒメは『容貌麗美』とあり(景行紀四年二月)、またおなじく美濃国造カムホネの女、アネトオコ、オトトオコは、ともに『国色』と言われた(同上)。天皇が誘惑した熊襲の二女、姉のイチフカヤと妹のイチカヤとは、ともに『容貌端正』とあり(同紀十二年十二月)、また襲国で召して妃としたミハカシヒメは、『佳人』であった(同紀十三年五月)。また同天皇が娶らんとしたイナミノワキイラツメは、『端正こと

當時に秀れたり』といわれた(播磨風土記印南郡)。

神功皇后は、『聰明叡智。貌容壯麗』といわれた

(神功撰政前紀)。応神天皇が近江国の木幡村で遇ったヤカ

ワエヒメは、『麗美き嬢子』であり(古事記中)、また天皇

が日向から召したカミナガヒメは、『顔容麗美』とか、『姿

容端正』と言われた(古事記中)、書紀では、彼女は『国色

之秀者』とあり、同女を見た皇子のオオササギノ尊は、

『其形之美麗』に感じて、恋情をおこしたという(応神紀

十一年十月、十三年九月)。難波のヒメゴソノ社にいますアカ

ルヒメという神は、玉から化身した女で、『美麗き嬢子』

と言われた(古事記中)。

仁徳天皇に召されたけれども、皇后のはげしい嫉妬をお

それて本国の吉備に逃げたクロヒメは、『容姿端正』と言

われた(古事記、下)。同天皇がヤタノワキイラツメを恋し

た歌句に、『清女』がある(同上)。允恭天皇の御子カルノ

オオイラツメは、別名を衣通郎女と言われたが、それは、

身の光が衣を通したからだという(古事記、下)。しかるに

書紀によると、皇后の同母妹のオトヒメは、『容姿絶妙て

比びなし。その艶色、衣より徹りて晃る。是を以て時の

人、号て衣通郎姫と曰ふ』とある(允恭紀七年十二日)。太

子のキナシノカルノ皇子とカルノオオイラツメとは、同母

兄妹でありながら、恋をしたが、カルノオオイラツメは、

『艶妙』と言われた(同紀二十三年三月)。

雄略天皇がミワ河で見た衣洗う童女のアカイコは、『容

姿甚麗』といわれ(古事記、下)、また同天皇が吉野川のほ

とりで遇って婚した童女は、『形姿美麗』といわれた(同

上)。また同天皇が、采女のオナキミと一夜寝ただけで、

はらまし、生ませた女子は『麗哉少女』といわれ(雄

略紀元年三月)、また同天皇は、倭の采女のヒヒメの『面貌

端麗しく、形容温雅』なのを見て大いに悦び、手をたずさ

えて後宮に入ったという(同紀二年十月)。キビノタサが友

達に向って、『天下の麗人は、吾が婦に若くは莫し。茂

矣に綽矣にして、諸の好備れり。擘矣に温矣にして、種

の相足れり。鉛花、御はず、蘭沢、加ふることなし。曠し

き世にも儔ひ罕ならむ。當時には独り秀者たり。』と、じぶ

んの妻ワカヒメをさかんにほめたが、鉛花は白粉、蘭沢は

香油で、こういうものを用いないで、そのままの素顔でうるわしいというのであって、これを聞いた天皇は、夫のタサを任那につかわして、ワカヒメを召して女御とした。別本では、タサの妻はケヒメといい、『体貌閑麗』とある(同紀七年)。

継体天皇の父が、フリヒメの『顔容が姝妙しく、甚だ微色』あるのを聞いて、これを召して妃とした(同紀即位前紀)。マガリノオヒネノ皇子がカスガノ皇女を聘したが、その歌句に、『……春日の国に麗し女を有りと聞きて、宜し女を 有りと聞きて……』とある(同紀七年九月)。肥前風土記(松浦郡)によると、宣化朝に任那につかわされたオオトモノサテヒコが、肥前国の篠原村にきてオトビヒメと婚したが、彼女は『容貌美麗しく、特に絶人間』といわれた。

推古天皇は、『姿色端麗しく、進止軌制』と言われた(推古紀即位前紀)。

聖武天皇天平十二年の朝賀に際して、『奉翳の美人更に袍袴を著く』とあるが(続日本紀十三)、奉翳美女は、翳を

とる女官である。称徳朝に信濃国伊那郡の人、オサダの舎人チヨメは、若くして才色有り』と言われた(同上、二九、神護景雲二年六月)。桓武天皇の皇后の藤原乙牟漏は、『性柔婉にして、美姿』であったといわれる(同上、四〇、延暦九年閏三月)。

常陸風土記(香島郡)によると、ウナカミノアゼの嬢子は、『形容端正。光華郷里。』といわれた。

万葉集には、『うるはしき人』(卷三、挽歌)、『仙媛』(卷五)、『うつくしと 我が思ふ妹は』(卷十一、施頭歌)、『うるはしと 我が思ふ妹』(卷十二、正述心緒、卷十五)、『うつくし妻』(卷十三、相聞)、『百嬌無儔。花容無止。』(卷十六)、『其婦容姿端正。秀於衆諸。……讚嘆美貌一也』(同上)、『相美人』(卷十八)、『かぐはし君を』(同上)、『うるはしき 我が妻』(卷十九) などが見られ、懐風藻には、『詠美人』という題詞や、『麗人』などの詩句が見られる。

以上採録した語句は、いずれも美女をしめすものではあるが、しかしただ顔がうるわしいとか、きれいだとか、姿

がとどのつていっているというような、おおまかな、抽象的な言い方であって、そのうるわしさの具体的な表現はみられない。

三

万葉集には、美女を花にたとえた歌が多くある。

見渡せば 向つ尾上の 花匂ひ 照りて

立てるは はしき誰が妻。

は(巻二十)、見<sub>三</sub>江南美女、作歌と、題詞にあるように、美女を美しく咲いている花に、たとえたのである。

高<sub>なかもと</sub>円の 野<sub>の</sub>辺<sub>のかほばな</sub>の容<sub>の</sub>花<sub>はな</sub> 面影に 見えつつ

妹は 忘れかねつも。

は(巻八、秋相聞)、野辺に咲いた美しい容花、すなわちヒルガオの花を見ると、お前の幻影がうかんできて、忘れることができない、というのである。

…… 青山を ふりさけ見れば 躑躅花

匂へる少女 桜花 栄ゆる少女 …は

(巻十三、問答)、少女の美しさを まさかりのツツジや、

古代の美女、醜女

桜の花にたとえたのである。

をさとなる 花橘を ひきよぢて 折らむすれど

うら若みかも。

は(巻十四、東歌)、美しい少女を花橘にたとえたのである。

撫子の 花見るとに 少女らが 笑<sub>え</sub>まひのにほひ

思ほゆるかも。

小<sub>さ</sub>百合花 ゆりも逢はむと したばふる

心しくは 今日も経<sub>へ</sub>めよも。

は(巻十八)、ナデシコやユリの花を見て、かわいい女を心にかべたのである。

山吹の 花とりもちて つれもなく 離<sub>か</sub>れにし妹を

しぬびつるかも。

とか、

山吹を 宿に植ゑては 見るとに 思はやまず、

恋こそまさされ。

は(巻十九)、山吹によって、妹を恋しく思うたのである。

花にたとえられた美女は、その花の特長によって、いくらか美女の風姿を想像することのできる場合があるにして

も、多くはただ花のように美しいと、いうだけであって、具体性にとぼしいことに、かわりがない。それにしても、美女を花にたとえるということは、人事と自然との対立ではなく、両者のなごやかな融和であって、これが古代人の美意識の特長と言つてよい。

しかるに次の歌、

……… 梓弓 末の珠名は 胸わけの 広き我妹

腰細の 螺贏少女の その顔の 厳しけさに

花のごと 笑みて立てれば 玉梓の 道行く人は

己が行く 道は行かずて よばなくに 門に至りぬ

………

は(巻九、雑歌)、上総国の周准の珠名という少女は、胸幅がひろく、蜂のように腰が細くて、しなやかな可愛い少女であつて、ととのつた美しい顔で、花のように、ほほえんで立っていると、道を行く人々は、じぶんの行くべき道を行かないで、呼びもしないのに、門にやってくる、というのであつて、単に顔がうるわしいというだけでなく、胸や腰の風姿までのべているのが、特長である。また

桃の花 紅色に 匂ひたる 面わの内に  
青柳の 細き眉根を 笑み曲り 朝影  
見つつ 少女らが ……

は(巻十九)、桃の花のように、ほんのり紅く色づいた顔に、青柳の葉のような、細い眉毛をあげ、さげして、ほほえみつつ朝の姿を見ている少女をのべたものであつて、桃の花と柳の葉との対比は、巻五の遊<sub>ニ</sub>於松浦河<sub>一</sub>序にも、『開<sub>ニ</sub>柳葉於眉中<sub>一</sub>。発<sub>ニ</sub>桃花於頬上<sub>一</sub>』とある。

少女の紅い頬と細い眉とをあげて、その愛らしさをのべたのである。

応神天皇が、近江国の木幡村で、美女のヤカワエヒメに遇つて宴飲した時の歌に、

……… 木幡の道に 遇はしし嬢子。後方は 小楯か  
も …… 眉画き 濃に画き垂れ 遇しし女。……

とあり(古事記、中)、うしろ姿は、楯のように、すらりとしてあり、眉をうつくしくかいた女というのであろうが、美女の形容として、後姿の様子や、眉画きのことをのべて

いるのは、特色である。眉がきについては、次の歌がある。

ふりさけて 三日月みれば 一目見し 人の眉引まよひき

思ほゆるかも。

は（巻六、雑歌）、はるか遠く三日月をみると、ただ一目見た人の眉引が思い出される、というのである。眉引は、眉墨で眉をえがき引くことであって、女性の化粧の一つである。

思はぬに 至らば妹が うれしひと 笑まむ眉引

思ほゆるかも。

は（巻十一、正述心緒）、思いがけず、不意に行ったなら、うれしくて、にこにこする眉引の顔が思われる、というのである。

わぎもこが 笑める眉引 面影に かかりてもとな

思ほゆるかも。

は（巻十二、正述心緒）、笑っている妹の眉引が幻に浮んできて、何のわけもなく思われる、というのである。

仲哀紀八年九月の条に、『美人をとめの 睞まよひきの如くなる向津国

古代の美女醜女

あり。』とあって、新羅を指してある。睞は眉引であって、眼のかがやく金銀が新羅に多く産するとあるから、眉引によって、美人の眼が美化されるのであろう。

さにづらふ 妹を思ふと 霞立つ 春日もくれて

恋ひわたるかも。

は（巻十、春相聞）、紅顔の美しい女を思うと、のどかな春の日も、心くらく恋してやまない、というのである。

我のみや かく恋すらむ かきつばた にづらふ妹は  
いかにあるらむ。

は（巻十、夏相聞）、我ひとり、かく恋しているのか、あの紅顔の美しい女は、どうなのであろうか、というのである。

あから引く 色妙しきたえの児を しばし見れば

人妻ゆゑに われ恋ひぬべし。

は（巻十、秋相聞）、紅顔のうつくしい女を、たびたび見ると、人妻であるので、しょうがないと思ひながら、恋しく思う、というのである。

…… 望月の たれる面わに 花のごと

(一四三) 一四三



笑みて立てれば ……

は(巻九、挽歌)、勝鹿の真間の処女を詠んだ歌句で、満月のように、ふくよかな顔で、花のように笑って立っている、というのであろう。

## 五

女の顔の美しさは、またその頭髮の如何にもよるであろう。ヤマトタケルノ尊が熊襲征討の時、女装してその首魁を暗殺したが、それには、『髪を解きて童女の姿を作り』とあるから(景行紀二十七年十二月)、髪<sup>は</sup>の形が女性をしめす重要な条件であったのである。

万葉集(巻十三、問答)に、

然れこそ 年の八年を 切る髪の わが肩をすぎ

……

というのがあがるが、児が生まれてから、三四歳の頃、髪<sup>は</sup>の端をそろえて切り初め、これを深そぎと言ひ、八歳まで髪<sup>は</sup>の端を肩とひとしく切り、これを放髪<sup>はなり</sup>とも振分髪ともいひ、八歳から切らずにのばすのであって、八歳まで切った

髪がやあのびて、肩こしに垂れたのを、いうのであろう。

また巻九の挽歌の見三菟原処女墓歌に、

菟<sup>う</sup>原<sup>なり</sup>屋<sup>おとめ</sup>の 菟<sup>う</sup>原<sup>なり</sup>処<sup>おとめ</sup>女<sup>め</sup>が 八<sup>や</sup>歳<sup>とせご</sup>児<sup>こ</sup>の 片<sup>かた</sup>生<sup>なり</sup>の時<sup>ゆ</sup>ゆ

をばなりに 髪たぐまで ……

とあって、菟原処女が八才で、まだ十分成育していない時から、垂らしていた髪を、結びあげる頃までというのであり、また

橘<sup>たちばな</sup>の 寺<sup>てら</sup>の長<sup>なが</sup>屋<sup>や</sup>に わが率<sup>いね</sup>寝<sup>ね</sup>し 童<sup>う</sup>女<sup>な</sup>放<sup>はな</sup>髪<sup>り</sup>は

髪上げつらむか。

は(巻十六)、髪を結ばないで、そのままにして置いた童女は、すでに髪を結んだであろうか、というのであり、そうして『たちばなの こばの垂髪<sup>はなり</sup>が 思ふなむ』とあるように(巻十四、東歌)、振分髪にせる女兒を垂髪と言った。また允恭天皇の皇后の言に、『妾が初め結髪より、後宮に陪<sup>はべ</sup>ること、既に多くの年を経ぬ』とあるが(允恭紀七年十二月)、婦人が髪上げするのは、婚期になってからであって、ここでは婚姻のはじめから、すでに長い年を経た、というのであり、これらによって、婦人がその年齢によって髪<sup>は</sup>の

形のちがっていたことが、わかる。

天武紀十一年四月に、『男女悉く髪を結あげよ。十二月三十日以前に結あげ訖おわれ、唯し結髪の日は、亦た勅旨を待て』と詔し、また同紀十三年四月に、『年四十以上の女は、髪を結あげるも、結あげないも、このままであるが、巫かむな、祝はよりのものは、結髪あの例ではない』と詔し、さらに朱鳥元年七月に、『婦女の背に垂髪すること、猶故もとの如くせしむ』と勅した。また文武朝慶雲二年（七〇五）十二月に、『天下の婦女は、神部かむとも、齋宮宮人、及び老嫗でなければ、皆髻髪せよ』と令したが（統紀三）、神部齋宮宮人は巫祝であり、老嫗は四十才以上の老女である。

以上のように、女性の髪あの形は、時代や年齢や職掌などによって、いささか異なっていたであろうが、とにかく女性にとって、頭髪は大切なものであった。

アマテラス大神は、スサノオノ命が高天原に来るといふことを聞いて、これはうるわしい心からではなく、わが國を奪うばわんだためであると言つて、髪を解あいて角髪かづらとなしたといふが、角髪は髪を左右に分けて、耳のところみみで束むすねた男

性の髪形であるから、その形にしたのは、鬪争のかまえであらう。

垂仁天皇は、その後サホヒメに欺あかれたとて、これを捕えようとして軍士をつかわしたところ、后はその髪を剃りおとし、その髪をとって頭に覆おうていたので、軍士が後の髪をとって后を捕えようとしたが、髪が落ちて捕えそこなつたといふ（古事記中）。

これらの話によつても、婦人にとって、頭髪がいかに大切であつたかが、わかるであらう。

仁徳天皇は、吉備の海部直あまへのあたえの女黒日売が美女であると聞いて召されたが、彼女は大后の嫉妬をおそれて本国に逃げ帰つた。一体彼女のクロヒメという名は、如何なる理由によるのであろうか。顔の黒いのは、美女とは言われない、ところが、天皇は逃げた彼女を追うて、その本国で再会したほどであるから、よほど魅力のある美女であつたにちがいない。とすると、彼女のクロヒメという名の由来は、頭髪がとくに黒かつたからではなからうか。履中天皇の妃にも、継体天皇の妃にも、黒比売があるが、その名の由来は

明かでない。しかし本居宣長は、景行天皇の巻に見えるカ  
グロヒメについて、その名の義は髪カミの黒クロきをほめたのであ  
ろうと言っている(古事記伝二六) そうして万葉集には、黒  
髪をうたった歌が甚だ多い。

ありつつも 君をば待たむ うちなびく

わが黒髪に 霜の置くまでに。

は(巻二、相聞)、磐姫が仁徳天皇を恋慕した歌であって、  
わが黒髪に霜が降るまで、おいでを待っていていよう、とい  
うのである。

八雲やぐもさす 出雲の児らが 黒髪は

吉野の川の 沖になづさふ。

は(巻三、挽歌)、水死のさまを詠んだもので、黒髪が川の  
流れに浮び漂うというのである。

『わが黒髪の ま白髪に ならむ極きわみ』(同上) 『しきたへ

の 黒髪敷きて』(巻四、相聞)、『黒髪に 白髪まじり 老  
ゆるまで』(同上)、『ぬば玉の 黒髪白く 変りても』(同  
上)、『……………か黒き髪に いつの間か 霜の降りけむ』(卷  
五、雑歌)、『ぬば玉の わが黒髪に ふりなづむ 天の露

霜』(巻七、雑歌)、『…………… か黒き髪に 芥あぐたし附くも』

(同上)、『黒髪の 白くなるまで』(巻七、挽歌)、『黒かり  
し 髪も白けぬ』(巻九、雑歌)、『ぬば玉の わが黒髪を

なびけて居らむ』(巻十一、正述心緒)、『ぬば玉の 妹が黒  
髪』(同上)、『黒髪の 白髪までと 結びてし』(同上)、『ぬ

ば玉の わが黒髪を 引きぬらし』(同上)、『ぬば玉の 黒  
髪敷きて 長き夜を』(巻七、寄物陳思)、『うちなびく わ

が黒髪に 霜ぞ置きにける』(巻十二、寄物陳思)、『ぬば玉の  
黒髪敷きて 人の寝る』(巻十三、相聞)、『…………… 蝮みづなの

腸わたか黒き髪に 真棉まゆ綿よもて あさざ結むすひたれ』(同上)、『  
…………… 蝮みづなの腸 か黒き髪を 真櫛もて ここに搔かきたれ』

(巻十六)、『ぬば玉の 黒髪ぬれて』(同上)、『ぬば玉の 黒  
髪敷きて』(巻十七)、『…………… 紅の色もうつろひ ぬば玉

の 黒髪変り』(巻十九)、『…………… ぬば玉の 黒髪敷きて  
永ひき日を 待ちかも恋こひむ』(巻二十)。

右のように、ぬば玉の黒髪についての歌句の多いこと  
は、黒髪が女性にとって、きわめて大切なものであったこ  
とを、しめすと言ってよい。

一体黒色は、古代人においても、かならずしも重んぜられたのではないのであって、万葉集（卷十六）に、『嗤<sub>ニ</sub>咲<sub>ニ</sub>黒色<sub>ニ</sub>歌』があり、これは顔の黒い二人の男が、互に笑い合つたのであって、男性でも顔の黒いのは、あまりほめられないが、ことに女性においては、なおさらである。しかし顔とちがつて髪の色は、若さを象徴し、女性美をつよめる効果があつた。

さらにまた、髪の本質として重んぜられたのは、長髪であつた。

応神天皇は、日向国から髪長媛という美女を召したところ、皇子のオオササギノ尊が媛を見て、その美しさに恋情をおこしたので、皇子に媛を賜うたが（応神紀十三年九月）、カミナガヒメというかぎり、長髪が特色となつていたのであろう。万葉集に

たけばぬれ たかねば長き 妹が髪 この頃見ぬにかきれつらむか。

人皆は 今は長しと たけと言へど 君が見し髪みだれたりとも。

古代の美女、醜女

という問答歌がある（卷二、相聞）。これは三方の沙弥が園臣生羽の女を娶つたが、いくばくもなくして病臥した時の作で、前歌は、結ぶとほどけ、結ばないと長い妹の髪は、この頃見ないが、垂髪をあげて結んでいるであろうか、というのであり、後歌は、人は皆、髪が長いから結べといふけれども、この垂髪は、君に見初められたのであるから、たとえ乱れても、このままにして置きましょう、というのである。これらの歌によつても、女性の長髪が、男性の目をひくものであつたことがわかる。

ふりわけの 髪を短み 若草を 髪にたくらむ妹をしぞ思ふ。

は（卷十一、正述心緒）、左右にふりわけて垂した髪が短いので、若草を髪にたくり添えている妹が思われる、というのであつて、これによつても、長髪によさがわかるであろう。

正六位上左大史荆助仁の『詠美人』（懷風藻）に、『月、泛<sub>レ</sub>眉間<sub>ノ</sub>魄 雲、開<sub>レ</sub>鬢上<sub>ノ</sub>暉 腰、逐<sub>レ</sub>楚王<sub>ノ</sub>細<sub>レ</sub>体、随<sub>レ</sub>漢帝<sub>ノ</sub>飛<sub>レ</sub>』という詩句があつて、眉や髪的美とともに、腰や体のこと

を詠じてある。「楚王、細」は、管子（七臣七主）に、「夫楚王好<sub>二</sub>小腰。而美人省<sub>レ</sub>食。」とか、荀子（君道篇第十三）に、「楚莊王好<sub>二</sub>細腰。」とあるのをいっているのであり、「漢帝、飛」といするのは、後漢成帝の後趙昭儀のことであって、彼女は絶世の美人といわれ、「学<sub>二</sub>歌舞。号曰<sub>二</sub>飛燕。」とあるように（漢書卷九七、下）、その体がすらりとして軽かったのである。

以上の記事を要約すると、古代の美女は、きちんとととのった紅顔で、眉が美しく、長い黒髪、腰の細い、背のすらりとした女ということになる。

しかし人体の表現は、単に文献においてみられるのみならず、絵画、彫刻などの美術において、より具体的に表現されるのである。わが美術の発達は、大陸文化の影響によるのであって、ことに飛鳥、奈良時代において、いちじるしい発達をみた。

当時の美術の代表である仏像をみると、飛鳥時代のものは、概して面相が面長で、いわゆる杏仁形の眼と、仰月形

の口唇とを有して、古拙的微笑をたたえて、すこぶる観念的であるが、奈良時代のものは、面相は豊満で、体軀は立体感に富み、いちじるしく写実的である。絵画においても、ほぼおなじ特色を有し、薬師寺の吉祥天画像のごときは、繊細流麗な描線と豊麗な色彩とによって、きわめて感覚的な艶麗な美女である。ただ当時の美術は、大陸伝来の技法や仏教思想の影響を、つよくうけていることは看過できない。

## 六

つぎに醜女について、述べよう。

イザナギノミコトが、黄泉国から逃げ帰る時、イザナミノミコトは、黄泉醜女よもつしこめをしてこれを追わしめたところ、イザナギノミコトは、頭髪の飾りの鬘かづらや、櫛を投げ、それらが葡萄の実や竹の子となって、醜女がそれらを拾い食っている間に、逃げ帰ったという（古事記上、書紀六ノ一書）。

オオヤマツミノ神が、その娘のイワナガヒメとコノハナノサクヤヒメの姉妹を、ニニギノミコトにささげたとこ

ろ、ニニギノミコトは、美女の妹コノハナノサクヤヒメをとどめ、醜女の姉イワナガヒメを返したので、オオヤマツミノ神は、二女を奉ったのは、天神の御子の寿命が磐石のように堅くて動揺せず、また花のように栄えんがためであったのに、妹をとどめて姉を返したのでは、御子の寿命は木花のように、もろく散りうせるであろうと言ったという（古事記上、書紀二ノ一書）。

垂仁天皇は、皇后の申されるままに、ミチノウシノ王の女たち、ヒバスヒメノ命、オトヒメノ命、ウタコリヒメノ命、マトヌヒメノ命の四人を召されたが、前の二人をとどめて、後の二人が甚だみにくくあったので、本国に返された。すると、マトヌヒメ命は、おなじ姉妹でありながら、顔がみにくいために、返されることは、はずかしいと言つて、ついに深い淵に入水して自殺したという（古事記、中）。書紀では、ヒバスヒメ、ヌハタニイリヒメ、マトヌヒメ、アサミニイリヒメ、タカヌヒメの五人で、ヒバスヒメノ命を皇后とし、三人の女を妃としたが、タカヌヒメは形姿醜きたため本国に返され、これを恥じて自ら輿から落ちて死ん

だという（垂仁紀十五年二月）。

オオハツセノ皇子が、ミツハワケ天皇（反正）の皇女に求婚しようとしたところ、皇女たちは、皇子の強暴であることをおそれ、『妾たちは、顔色秀れず、情性拙し』と言って、拒絶した（安康即位前紀）。

以上の記事では、ただ顔貌形姿が醜いというだけであつて、どこが、どんな風に醜いのか、色が黒いのか、おたふくなのか、髪が短くてちじれているのか、などの具体的な描写はみられない。そうして醜女は、そのために結婚をしりぞけられ、果てはそれを恥じて自殺するものすら生じたのであつて、そのかぎりにおいて醜女は、まことに不運であつた、と言つてよい。しかし醜女として返されたイワナガヒメは、磐石不動の象徴とされているから、醜女のうちには、人生をつよく生きたものも、あつたであろう。

江戸時代の川柳に、『妹のさきへかたづく気のどくさ』というのがある（川柳選、明和時代）、これは姉の不器量を諷したのであるが、イワナガヒメのような強い女は、拒否されたことについて、残念がったり、うらんだりするより

も、むしろ自分を選びえなかつた男性のふがいなさを、あざ笑つたかも知れない。

わが古代の女性に例をみないが、中国の鍾離春は、戦国時代の齊の女性であつて、容貌がひどく醜いために、年四十になつても嫁がなかつたが、みずから宣王のところに行つて国事について進言し、王が大いによろこび、ついに彼女を迎えて后となし、それがため国が安らかになつたと言われるから、醜女のうちには、強い女があつたのである。

神話に、アメノウズメノ命がある。天石屋戸にこもられたアマテラス大神を迎え出すために舞樂をなし、また天孫降臨の時、その前に立ちふさがつたサルタヒコノ神があつたので、『汝は手弱女たわやめであるけれども、い向う神、面勝おもかつの神であるから、行つて応対せよ』とて、つかわされ(古事記上)、胸乳をあらわし、裳帯もひもを臍へその下にたらしした半裸体の姿で、あざわらいながら立ち向つた(書紀、一書)。い向うとは、手向い抵抗すること、面勝おもかつとは、相對しても、おめず屈しないことであつて、古語拾遺に、アメノウズメは、古語でアメノオズメであつて、この神は強悍つよくたけし猛固まごであ

るので名をなしたのであり、強女をオズシというのは、これによるのであると言つてある。

さてアメノウズメを、記紀ともに、美女とも醜女とも言つていない。彼女がしとやかな巫女ならば、美女らしくおもわれ、そうして美女の半裸体の姿を見て、さすがのサルタヒコも、ついに参つたとも解されないこともないが、しかし男神すら恐れをなしたサルタヒコに対して、すこしもひるむことなく、たち向つたような強い女は、美女よりも、むしろ代表的な醜女のように思われるが、いかがであるう。

## 七

オオクニヌシノ命は、麗女くわしめがあると聞いて、出雲国から遠い越の国にまで求婚にでかけ、景行天皇は、襲の国のミハカシヒメという佳かおよき人おみなを召して妃となし、応神天皇は、日向国のカミナガヒメが美女であると聞いて、これを召したように、遠い国からでも美女は求婚され、或はまた雄略天皇が、河のほとりで衣を洗っている女をみて婚約したよ

うに、路上でふと見られた女でも、美女であるために、天皇から婚約されたのである。

奈良時代の代表的女性ともいふべき光明皇后については、続日本紀(二五)では、『幼にして聰慧』とか、『仁慈にして志物を救ふに在り』などと、その性質についてのべてあるけれども(天平宝字四年六月)、その美醜については、何ものべていない。しかるに元亨釈書(一八)には、『体貌姝麗。似有光耀。故名焉』とあるから、すこぶるの美女であったのである。聖武天皇が、皇族でない彼女を敢て皇后にしたのは、単に藤原氏の勢力を利用するばかりでなく、聰明で美女である彼女の魅力に、心をひかれたからであろう。臣下の身から皇后となり、時代の政治や文化に関与できたのは、美女として幸運であったと言つてよい。

今昔物語集(巻十四)によると、聖武天皇は『形チ有様端正』な女を召して、一夜懐抱したが、彼女は実は蛇であったという。同書には、このほかにも美女についての話があるけれども、彼女らは夢にあらわれるとか、或は羅刹とか狐などの化身であつて、いずれも法花経の偉力を説いた

もので、実在した美女の話とはおもわれない。

上述したように、おなじ姉妹でありながら、醜女はしりぞけられ、美女が迎えられたのであつて、これらのことをみると、美女がどんなに幸運であつたらうか、と思われ

る。  
或は三節でのべたように、愛人を撫子や百合にたとえたのは、大伴家持が庭中の花を詠んだものの短歌であつて、その長歌に、『…… 咲く花を 出で見るごとに 撫子が その花妻に 小百合花 ゆりも逢はむと 慰むる 心し無くは あまざかる 鄙ひなに一日も 在るべくもあれや』と詠んである(万葉集卷十八)。花妻というのは、撫子のよ

うに、花やいだ故里の妻をいうのであり、ゆりも逢わんと  
いうのは、いつか後に逢うというのであつて、こういう慰  
めの心がなければ、遠く赴任している地方の田舎に、一日  
もいられないというのであつて、男性をして、かくまでつ  
よく愛慕の情をおこさせた美女は、さぞかし幸福であつた  
らうと思われる。或はまた  
我はもや 安見児得たり 皆人の 得が



てにするとふ 安見児得たり。

というのは(卷二、相聞)、内大臣藤原卿(鎌足)が采女の安見児を娶った時の歌であつて、誰も彼も皆得たいとのぞみながら得られない美女を、俺が手に入れたぞ、というのであつて、この得意満面のよろこびの声のうちに、彼女がうけたであろう愛撫がしのばれる。或はまた

旗薄 穂には咲きでぬ 恋を我がする 陽炎の

ただ一目のみ 見し人ゆるゑに(卷十、秋相聞)。

花ぐはし 葦垣越しに ただ一目 相見し児ゆるゑ

千度嘆きつ(卷十一、正述心緒)。

の二首は、ともにただ一目見ただけで、つよい恋慕になやむ、というのであつて、その結果はどうなったか明かでないけれども、一目見ただけで、男性をしてかくまでつよく恋慕の情にほだし、なやますことは、美しい女性として、ほほえましく、うれしいことでは、なかるうか。

これらの美女は、時として政略、軍略にもちいられた。大伴連狭手彦は、高麗を討って帰り、天皇には高麗の宮殿で得た種々の珍宝をたてまつり、蘇我稻目宿祢大臣には、

媛ひめという美女とその従女吾田子あたこを送り、大臣はその二女を納れて妻としたというが(欽明紀二十三年八月)、美女をおくったのは、大臣の歎心を得るための政略と言つてよい。

熊襲征討の時、その梟帥の美女を誘惑して、その父を殺さしめたり(景行紀十二年十二月)、或は葛城襲津彦が新羅征討につかわされたところ、新羅では美女二人を飾つて津に彼を迎えて誘惑せしめたので、彼はその美女をうけて新羅を討たないで加羅を討つたというが(神功紀六十二年、百済記)、これらは軍略に美女を利用した例である。

しかし人間の運命は、予測のできない不思議な点があつて、美女はかならず幸運であるとは言えず、美女であるために、却つて不運な生涯を送つたものもあつた。

仁徳天皇に召された美女のクロヒメは、皇后の嫉妬をおそれて本国に逃げ帰り、天皇はその後を追うたけれども、結局別れざるをえなかつた。雄略天皇に見せられた洗濯女のアカイコは、天皇の召しがないために、八十年を空しくすごし、すでに年老いて姿体かおかたちがくずれたけれども、天皇の召しを待っていた志を申さんとして参上し、天皇をおどろ

かしたという。江戸時代の川柳に、『三十になると女の世がすたる』というのがあるが（武玉川選）、むろん時代によって婚期にちがいがあつて、人によって晩婚を意にしなかつたり、老衰のおそい女もあるであろうが、天皇の言を馬鹿正直に信じて、青春を空しくすごしたことは、美女として、まことにわびしく、やるせないことであつたであらう。

またキビノタサの妻ワカヒメが、すこぶるの美女であつたので、同天皇は夫のタサを任那につかわして、ワカヒメを奪つてしまつたが、これは天皇の理不尽による夫婦の離別であつて、それがためタサは任地で謀反したのであり、しかも夫婦の間には、すでに二人の男の子があつたほどであるから、彼女は夫に対する愛情をすべて失つたとは思われず、たとえ天皇に召されたとしても、果して幸福であつたかどうか、疑わしい。別本では、タサの妻はケヒメで、天皇は彼女が美女であることを聞いて、タサを殺して、彼女をめしたという（雄略紀、七年八月）

カツシカのママのテコナは、美女であつたため、多くの

古代の美女、醜女

人々から求婚され、それにたえられないで、入水して死んだ（万葉集卷九）。また摂津のウナヒオトメは、二人の男から恋されて、その処置に窮して自殺し、それを聞いて二人の男も自殺した（同上）。またサクラノコという娘を妻にしようとして、二人の男が死をもつて争つたので、これを知つた彼女は、自分が死ねば、二人の争も止むであらうと思ひ、林中に入つて木にくびれて死んだといふ（卷十六）。またカズラコは、三人の男から恋せられ、女の体は露のように消えるが、三人の志は石のように堅いので、自分が死ぬより外ないと思つて、池に投身して死んだといふ（同上）。これらの女は、二人以上の男性が争つて恋慕したのであるから、うつくしい女性であつたにちがいない。しかるに彼女らは、その恋慕の処置に窮して自殺したのであつて、美女であつたことが、却つて不幸であつたと言わねばならぬ。

垂仁天皇の皇后サホヒメの兄サホヒコ王は、妹のサホヒメに、『色をもつて人に事えるのは危険で、色が衰えれば、寵愛がなくなるであらう。今天下に佳かおよきひと人が多く、互

に寵愛を求めているから、お前も色を恃むことはできない。それで、われら二人で永く天下を治めたいから、わがために天皇を弑せよ』と言って、謀反したが、結局失敗して、二人とも稻城で火にやかれて死んだ(垂仁紀四、五年)。サホヒメについては、記紀ともにことさら美女と言っていないけれども、その兄サホヒコの言からみれば、美女であったにちがいない、そうして色のよきことを、いつまでも恃みとすることはできないというのは、美女に対する警告と言つてよい。

美女が悲惨な最後をとげた例は、東西の歴史にみられる。エジプトの女王クレオパトラは、シーザーやアントニウスの心をつぎつぎに捕えて活動したが、最後にオクタ비아ヌスを誘惑しようとして失敗し、ついに毒蛇に乳房をかませて自殺したのであって、『クレオパトラの鼻がもうすこし低かったなら、世界の顔は、すっかり変わっていたであろう』と、哲人パスカルを言わしめたほどの美女であったが、その最後は悲惨であった。

中国の唐の楊貴妃は、絶世の美女として知られ、はじめ

玄宗帝の子の妃であったが、後離縁せられて帝の寵妃となつた。しかるに彼女に対する玄宗帝の寵愛が深まるにつれて、その政治がみだれ、それがため反乱が起り、その原因は貴妃にあるとて、ついに縊殺されてしまった。

彼女らは、当時の偉い男性を魅惑した美女であつて、しかもつよい女であつた。『弱きものよ、汝の名は女なり』というハムレットの言は、彼女らに、あてはまらぬように思われるけれども、これは女性の活動について言っているのではなく、彼はまた『美というやつは、貞淑をまたたくまに淫売婦に変えてしまふ』と言っているように、その道義や節操について言っているのであるから、クレオパトラ、楊貴妃に対しても、よくあてはまるのである。

## 八

人生は、まことにふしぎであつて、予知することはできない。権勢家もその権威を恃むことはできず、富豪もその富にたよることはできず、盛衰興亡はつねに見られるのである。それとおなじように、美女といえども、その美をた

のむことはできず、却って不運に陥ることがある。とすれば、醜女であっても、すこしも恥ずることなく、正しくつよく生きることによって、幸運にめぐまれることがあるかも知れない。古代の美女、醜女についても、人生のはかりしれない不思議とおもしろさを、感ずるのである。

史学 第46卷3号 三橋富治男  
「小アジア・トルコ化の一測面」正誤表

頁	行	誤	正
15	12	1	5
		マムルーの سلطان	マムルーク・ سلطان
		除外視しての数字である時に	除外視しての数字である。時に
		Claude Caban	Clude Cahen